

職場におけるからかいを終わらせること

Ending Teasing in the Workplace

高橋 亜里沙(千葉大学, 人文公共学府)

Arisa TAKAHASHI (Chiba University,
Graduate School of Humanities and Studies on Public Affairs)

Abstract

The purpose of this paper is to describe the process of attempting to end teasing in workplace settings. This sequence involves initiating teasing, receiving a response to that teasing, and then, in a third turn, the teaser or side-participant providing resolution. The analysis conducted in this study revolves around such procedures.

1. はじめに

本稿が扱うテーマは、連鎖の終え方にかかわるものである。本稿においてはその中でも特に、Schegloff(2007)における後方拡張の *sequence closing third* (SCT)に着目したい。SCTは、隣接ペアの第1・第2部分に付加され、連鎖を閉じるための3番目の発話のことである。Schegloff(2007)では、このような発話として、英語の‘oh’や‘okay’、‘good’などの評価発話をあげている。しかし、この3番目の発話というのは、連鎖組織の基本単位として必須のものではなく、あくまで基本単位に付随するものである。この点において、教室場面における、3つの発言順番の組を連鎖組織の基本単位だとする考え方とは違うのである。つまり、教授連鎖では3番目に評価が現れることが義務的(Mehan 1979)だとすることとは違うのである。

また、他の制度的場面でいうと、診療場面では、平坦な「ふーん」が3番目の発話でよく見られるという(Aoki 2008)。Aoki(2008)によれば、この「ふーん」は、新しい情報を受け止めることだけをして、その情報に対する評価を差し控えることを示す。

本稿では、職場におけるからかいの次のような連鎖を取り上げる。それは、からかい、からかいに対する応答の後に、からかい手がからかいで指摘された矛盾に解決を与えるというものである。本稿は、このような連鎖について、何を行っているのか記述する。

2. からかいについて

3で説明するデータからからかいを抽出する際の定義について説明をする。

からかいの先行研究から得られた重要な知見の一つに、からかいは常に二人以上の参加者による相互行為の成果であるということがある(Drew 1987 ; Haugh 2010)。つまり、からかいは、からかい手と受け手が共同で作り上げるもの(千々岩 2013)であり、人間関係と強く関わっている相互行為である。もう一つの重要な知見は、からかいが先行話者の違反やミスによって引き起こされることが非常に多いことである(Drew, 1987)。

本稿ではからかいを、「明示的に「遊び」である要素が示されていると同時に、攻撃的な要素のある社会的行為を含むもの」と定義する(図1)。

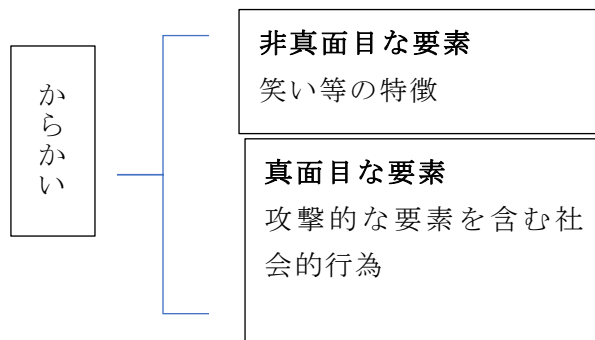


図1 本稿におけるからかいの定義(高橋 2024 印刷中)

3. 調査方法及び概要

3.1 フィールドのA社

A社は、創業から調査時点までに、まだ5年も経過しておらず、社員には、社長が以前勤めていた企業の同僚や知り合い、個人的な友人が多くいる、いわゆるベンチャー企業で、業種はITである。20、30代が中心で風通しがよく、「からかい」のようなユーモアのある発話が多く見られるため、A社をフィールドとし、調査を実施した。また、どのデータにおいても筆者は参与観察として参加した。

後述するように、社内には4つの階層があり、社員以外に大学生等のインターンシップや他社から研修で来ている方も存在した。

3.2 データ概要

データ収集は、2019年6月～9月にかけてA社ⁱⁱの協力を得て行った。本研究で用いるデータは、以下のようにA社におけるランチおよび会議、会議前後の会話を録音・録画したものである。

- ・データ1：2019年6月、A社社内におけるウィークリーミーティング、会議前後の録音・録画、データの時間は56分
- ・データ2：2019年6月、社外のインド料理店で行われたランチの録音、データの時間は32分
- ・データ3：2019年7月、社内におけるランチの録音・録画、データの時間は54分
- ・データ4：2019年9月、社内における朝会の録音・録画、データの時間は36分
- ・データ5：2019年9月、社内におけるデータ1と同様のウィークリーミーティング、会議前後の録音・録画データの時間は64分

また、A社の階層については図2に、からかい連鎖に出てくる主な調査協力者の背景については、表1にまとめた。表1からもわかるように、A社の社員は20代や30代前半の年齢の方が中心であり、からかいを含む会話が多く見られる。

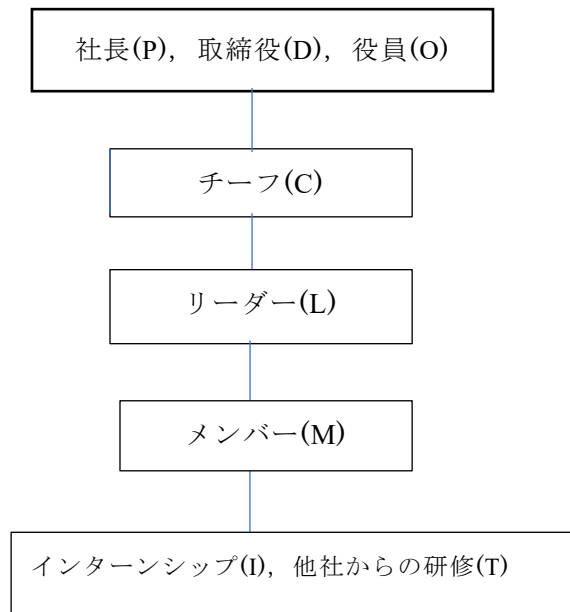


図 2 A 社における構成員の階層

表 1 調査協力者の背景

コード	性別	年齢	職階	在職期間	参加した会話
PM1	男	30 代前半	社長	創業時から	1, 2, 3, 4, 5
DM1	男	30 代後半	取締役	創業時から	1, 5, 6
OM1	男	30 代後半	役員	約 2 年半	1, 4, 5, 6
CM1	男	30 代半ば	チーフ	1 年 4 か月	1, 2
CM2	男	40 代前半	チーフ	約 1 年	1, 3
CM3	男	30 代半ば	チーフ	約 2 年半	1, 4, 5, 6
LM1	男	30 代前半	リーダー	半年	1, 3, 4, 5, 6
LM2	男	30 代前半	リーダー	約 2 年	1, 4, 5
LM3	男	20 代後半	リーダー	約 2 年	1, 4, 5, 6
LM4	男	20 代半ば	リーダー	約 1 年(インターンシップ期間を入れると約 3 年)	1, 4, 5, 6
LF1	女	20 代後半	リーダー	約 1 年半	1, 4, 5, 6
MM1	男	30 代前半	メンバー	約 1 年半	1, 2
MM2	男	20 代後半	メンバー	約 2 年	1, 2, 4, 5, 6
MM3	男	20 代半ば	メンバー	5 ヶ月	1, 2, 4, 5, 6
MM4	男	20 代半ば	メンバー	3 ヶ月	1, 2, 4, 5, 6
MM5	男	20 代後半	メンバー	約 3 年	1, 4, 5
MM6	男	20 代後半	メンバー	約 1 年半	1, 4, 5
MM7	男	20 代前半	メンバー	1 ヶ月	4, 5, 6
MF1	女	20 代後半	メンバー	5 ヶ月	1, 2, 3, 4, 5

MF2	女	30 代前半	メンバー	3 ヶ月	1, 3, 4, 5
TM1	男	20 代前半	他社からの研修	3 ヶ月	4, 5, 6
IF1	女	20 代前半 (大学生)	インターンシップ	2 ヶ月	1

4. 連鎖の構造

本稿で着目する連鎖の構造について例 1 を用いて説明する．→はからかい，⇒はからかいに対する応答，➡はからかい手による，解決を与える発話を示している．事例 1 は，PM1 が母親のことを「ババア」や「おばはん」と呼んでいたという話から CM2 の母親は厳しく，友達も蹴ったりしていたという話に移った後のやり取りである．

事例 1 (データ 3)

- 01 CM2 : すっごい外面いいんっすよ (0.5)
02 すんごい外面いいから : :
03 CM1 : ° ほ:ほ:°
04 (0.6)
05→MF2 : でも (h) 蹴るんですよ [ね hh=
06⇒CM2 [° あの:そうそう°
07 MF2 : =[hhh
08→PM1 : [.hh 外面よく↑な(h)くね，(h)蹴るんだったら
09 複数 : hhh[h
10⇒CM2 : [>あでもく(.) 友達↑の:，
11 MF2 : うん
12➡PM1 : [仲いい人ね
13 CM2 : [子供の友達とかどうでもいいじゃないですか。
14 MF2 : ↑あ:↓あ:あっ
15 CM2 : 大人のそのそとみとか[を:
16 MF2 : [あっ，そういうことです↑ねっ
17 (0.6)
18 CM2 : 社交性がすごい
19 MF2 : ↑う: : : ↓ん (0.4) そ:なんだ

事例 1 において，05 行目の「でも蹴るんですよ」と 08 行目の「外面よくなくね，蹴るんだったら」がからかいである．ともに笑いを伴っていたり，08 行目の「外面よく↑な(h)くね」の「な」の音の調子が上がっていることから，真面目に指摘をしているのではなく，からかいであることがわかる．からかいに対する応答が，06 行目と 10 行目である．そして，からかいで明らかになった問題の解決を 12 行目で，からかい手である PM1 が与えているのである．

事例 2 は LM1 の父親の趣味の蝶の採集についての話から、標本にするための薬品の名前が話題になった後である。

事例 2 (データ 3)

- 01 PM1 : >親とか好きじゃないでしょ？<
02 (0.4)
03 MF1 : ↑え, なんですか？
04 PM1 : >親好きじゃないっしょ, <
05 MF1 : 親(.) 親好きですよ
06 PM1 : あ, [そうなの,
07 MF2→ : [え. なんでそれ決め付けた[hhh=
08 複数 : [hhhh
09 CM2→ : [hh なんでそんな(h)=
10 → : =そ: なるの
11 MF2→ : =なんか決め付けてんだけど, [° そ: ゆうこと°
12 PM1⇒ : [いやーいや. 僕同系統
13 だと思ってる.
14 MF1 : [↑あ:::
15 LM1 : [あ:::
16 MF2➡ : [あ, 自分が好きじゃないからね.

事例 2 において, 07, 09, 10, 11 行目が PM1 に対するからかいである. ここでは, 大きな笑いを含みながら PM1 を非難しており, からかっていることがわかる. このからかいに対する応答が 12 行目の「いやーいや. 僕同系統だと思ってる.」という否定, 訂正である. そして, 16 行目で MF2 自身は解決したことを示しているのである.

以上からまとめると, 本稿において着目する連鎖は以下のとおりである.

- 01 A : からかい
02 B : からかいに対する応答
03 A : 解決を与えたり, 解決したことを示す

5. からかいを終わらせること

それでは, 4 で述べた連鎖, すなわち, からかい, からかいに対する応答の後の 3 番目で, からかいで指摘している問題の解決を与えることは, 何を行っているのだろうか.

まず, 何が原因でからかいが起きているのか確認しよう. 事例 1 では, まず 01, 02 行目は物語の前置き (story preface) になっている (Sacks 1974). 特に 01 行目の「すっごい外面いいんっすよ」は文法的に完結しているのに対し, 02 行目では「すんごい外面いいから:::」と文法的に完結しておらず, 「から」を用いていることから, 物語を語り続けようとしていたことが窺える. しかし, 事例 1 の前で語っていた, CM2 の母親が厳しく, CM2 の友達を蹴っていたということと, 外面がいいが対照的であり, 矛盾が生じてしまう.

そのため 05 行目でからかいが起こったのである(矛盾が生じた場所という点では, 01 行目の 0.5 秒の間でこの 05 行目のからかいが行われていてもよかったと思われる). 事例 2 では, それまで話していた薬品の名前についての話から, 全く違う話題を PM1 は急に 01 行目で持ち出している. そして, 01 行目で「親とか好きじゃないでしょ?」と「でしょ?」と語尾が上がり, ある程度確定した形で MF1 に確認を求めている. 0.4 秒の間の後 03 行目で MF1 は聞き返しを行い, 04 行目で PM1 は切り詰めた形で 01 行目の確認の求めを繰り返している. それに対して, 05 行目で MF1 は「親好きですよ」と確認を与え, 否定している. PM1 が「親が好きじゃない」という確信を持って 01, 04 行目で確認を求めたにもかかわらず, 実際はこの MF1 は親が好きだということが明らかになったため, 07 行目から, からかいが起こる.

では, 事例 1 や事例 2 におけるからかいは, 何をしているのだろうか. 事例 1 の 05 行目で MF2 は「でも(h)蹴るんですよ hh」と矛盾を指摘し, 矛盾の解決を誘い出している. 08 行目の PM1 によるからかいでは, どのような矛盾があるか 05 行目のからかいより, 矛盾点の明示化がなされている. つまり, 08 行目では, 「外面よく↑な(h)くね, (h)蹴るんだったら」と「外面」と「(子どもの友達を)蹴る」ということが対照化されることで, 何を解決すべきか明示化されているのである. 事例 2 では, 01 行目の決めつけるような確認の求めに対し, 05 行目で「親好きですよ」と否定した後, 06 行目で PM1 はまず「あ」と驚きを表示し, 「そうなの」と PM1 にとって意外な情報であったことを述べる. この 06 行目の途中の 07 行目で MF2 はまず「え」と驚くことをし, 「なんでそれ決め付けた」と PM1 を非難するからかいを行っている. そして, 09, 10 行目で CM2 も「なんでそんな(h)そ:なるの」と, 非難するからかいに加わっている. さらに, ここまでで PM1 の反応がないため, MF2 は 11 行目でからかいを繰り返している. しかし, 07 行目では「なんで」と理由を問う形でからかっているのに対し, 11 行目では「なんか」と応答が必ずしも必要ではない形で, PM1 が決めつけたことを不確実なものとし, からかいを弱めている.

Drew(1987)によると, からかいに対する応答のほとんどは, 拒否や訂正であるという. 事例 1, 2 におけるからかいへの応答も否定や拒否, 訂正が見られる. まず事例 1 では, 5 行目のからかいに対し, 06 行目で CM2 は「そうそう」とからかいを受け入れることだけをしている. しかし, この 5 行目は矛盾の解決の誘い出しであり, 「そうそう」とからかいを受け入れるだけでは, 応答したことにならない. そのため, 08 行目で PM1 は矛盾を明示化する形でからかう. それに対し, 10 行目で CM2 はまず, 「あ」と「外面」と「(子どもの友達を)蹴る」という矛盾点について, 今気づいたことを表し, 「でも友達の」と否定し, 訂正する説明を行っている. 事例 2 では, 07~11 行目のからかいに対して, 「いや」と否定し, その後「僕同系統だと思ってる」と訂正, 自分を正当化している.

からかいとからかいに対する応答があれば, この連鎖は完了可能である. しかし, 事例 1 と 2 では, 連鎖はさらに後方に拡張されている. 1 で述べたように, この 3 番目の発話を Schegloff(2007)では, sequence closing third (SCT)と呼び, 英語の ‘oh’ や ‘okay’, ‘good’ などの評価発話がある. さらに, 笑いや慣用表現も連鎖を閉じようとする働きがある(Jefferson 1993). 本稿における事例 1 と 2 では, どのような発話を産出し, またそれは, 何を成し遂げているのだろうか.

まず、3 番目の発話は、からかいで指摘されている問題についての解決を与えたり、解決したことを示している。事例 1 では、10 行目のからかいに対する応答は、「友達の：」と説明を続けようとしている。しかしその説明の途中で、12 行目「仲いい人ね」と PM1 は割り込んでいる。ここで PM1 は仲のいい友達には蹴るということね、と自分で解決を与えて、PM1 は解決したと示している。事例 2 の場合、12, 13 行目のからかいに対する否定、訂正に対し、3 番目の発話として 16 行目で MF2 は、「あ」と今気づいたことを示し、「自分 (PM1) が (両親のことを) 好きじゃないからね」と 12, 13 行目で述べていることについての理解を示し、MF2 自身は解決したことを示している。ただ、事例 1 と違い、事例 2 の 16 行目は PM1 が両親のことを好きではないという知識を持っていないとできなく、誰でもできるものではない。つまり、PM1 に関する知識についての志向性、認識性 (epistemics) が見られる (Heritage 2012, 早野 2018)。

最後に 3 番目の発話で解決したことを示すことで何を成し遂げているのか考えたい。それは、からかいが開始した連鎖を終わらせる、閉じようとしているのである。事例 1 では、からかいに対する応答で CM2 は 10 行目で「でも友達の」と真面目に矛盾を解こうとしている。そのあとで 12 行目の解決したことを示す発話が産出されている。ここでこの発言をすることで、FTA (Face Threatening Act) (Brown & Levinson 1987) となりうるからかいに対して、一番早いところで解決を与えて、真面目に矛盾の指摘をしているわけではないことを示し、8 行目のからかいの効力をできるだけ早く停止したいという志向が伺える。事例 2 についても、なぜ MF1 が親を好きではないかと PM1 が考えた理由が、からかいに対する応答で述べられた一番早いところで、解決をしたことを示すことによってからかいの連鎖を閉じてエスカレートしないようにしている。

6. おわりに

本稿では、からかい連鎖における、第 1 部分のからかい、第 2 部分のからかいに対する応答に付加される、連鎖を閉じるための 3 番目の発話について検討してきた。隣接ペアに付加され、連鎖を閉じるための 3 番目の発話の SCT は様々なことを行っている。すでに述べたように、Aoki (2008) によれば、診療場面における 3 番目の発話の「ふーん」は、新しい情報を受け止めることだけをして、その情報に対する評価を差し控えることを示している。また、Schegloff (2007) では、「oh」は、隣接ペアの第 2 部分が、自分にとって新たな情報であることを示しているとしている。本稿におけるからかい連鎖の 3 番目の発話は、からかいの受け手に対して、からかい手が解決を与えたり、からかい手自身はからかいの受け手が述べていることを理解したと示している。そして、これをからかい連鎖の第 2 部分の後、一番早いところで産出することで、からかいの連鎖を終わらせようとし、からかいがエスカレートしないように、からかいの効力を停止していた。SCT を一番早いところで産出することで、からかいの連鎖を終わらせようとするのは職場の会話でなく、親しい友人同士の会話でもありうる。ただ、職場の会話では、役職や年齢等の違いにより、より「フェイス (Face)」(Goffman 1967) を脅かさないように配慮していると思われる。本稿における事例は 2 つと少ない。今後、からかい連鎖における 3 番目の発話の SCT について、何を成し遂げているのか、多くの事例の中で検討していかなければならない。

文字化記号

音の重なり	[]
発話の密着	=
0.2 秒以下の短い間	(.)
0.2 秒より長い間	(実際の秒数)
語尾の音調が下がっている場合	.
音が少し上がって弾みがついていて続きがあることを予測させる場合	,
語尾の音が上がっている場合	?
音の引き伸ばし	:
— 音の強調	—
音量の小ささ	°
言い直し・言いかけによる音の途切れ	—
音の調子の急な下降	↓
音の調子の急な上昇	↑
他の部分より目立って速いスピードで発話された部分	> <
目立って遅いスピードで発話された部分	< >
笑い顔でなされる発話	¥
呼気音	h
吸気音	. h
笑いながら産出される発話	(h)
話しながらでない笑い	h h . h h
ノンバーバル要素の発話	(())

- i 「遊び」とは、それを作る行為が、何らかの「非遊び」の行為と関係する現象であり、個々のメッセージを表す点々が、囲いの線で括られる「遊びの」メッセージと、外側のいわゆる「マジメな」メッセージにわかれるとされている(Bateson 1972) .
- ii 調査前に A 社の調査協力者全員から承諾書のサインや押捺等をいただいた。

参考文献

- Aoki, H. (2008). *Hearership as interactive practice: A multi-modal analysis of the response token nn and head nods in Japanese casual conversation*. Unpublished doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.
- Bateson, G. (1972). *Steps to an Ecology of Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press. (田中典子監訳、斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳(2011). ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象研究社)
- Drew, P.(1987). Po-face receipt of teases. *Linguistics* 25. pp.219-253.
- Goffman, E. (1967). *Interaction Ritual_: Essays on Face-to-Face Behavior*. Garden City, NY: Anchor Books. (広瀬英彦・安江孝司(訳)(1986)『儀礼としての相互行為』法政大学出版会)
- 早野薫. (2018). 「認識的テリトリー—知識・経験の区分と会話の組織」平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実(編)『会話分析の広がり』pp.193-224. ひつじ書房
- Heritage, J. (2012). Epistemics in Action: Action Formation and Territories of Knowledge. *Research on Social Interaction* 45(1). pp.1-29.
- Jefferson, G. (1993). Caveat speaker: preliminary notes on recipient topic-shift implicature.

- Research on Language and Social Interaction* 26. pp.1-30
- Mehan, H. (1979). "What Time Is It, Denise?": Asking Known Information Questions in Classroom Discourse. *Theory into Practice* 18(4): pp.285-294.
- Sacks, H. (1974). An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In J. Sherzer. and R. Bauman. (Eds.), *Explorations in the ethnography of speaking* (pp.337-353). London: Cambridge University Press.
- Schegloff, E, A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高橋亜里沙. (2024 印刷中). 「日本の職場において威圧的な態度を避けるということー「からかい」とその応答に着目してー」『千葉大学人文公共学研究論集』48